

モリ保険事務所(創業大正7年) 第3話

会ったことのない顧客、承継の危機

写真1枚すら残らなかった東日本大震災



3代目の森雅志氏

父親の急逝で森雅志氏、急ぎよ帰国

2代目の良雄氏は平成4年(1992年)に急逝する。知らせを受け、米国に留学中だった現社長の雅志氏は急ぎよ帰国する。良雄氏の急逝は、雅志氏のその後の生き方を180度変えた。

当時、雅志氏は海外の見聞を広げる目的で米国サンフランシスコへ留学していた。MBAを取得

膨大な数の顧客、書類の山、対応しなければならぬ案件の数々。そうした厳しい現実が雅志氏に突き付けられた。「精神的には厳しかった。限られた地域の中で、顧客との関係がまったくつかぬなかつたからだ。ただ、逆に、顧客はわたしの留学のことまで知って

百年代理店 かく語りき

膨大な数の顧客、書類の山、対応しなければならぬ案件の数々。そうした厳しい現実が雅志氏に突き付けられた。「精神的には厳しかった。限られた地域の中で、顧客との関係がまったくつかぬなかつたからだ。ただ、逆に、顧客はわたしの留学のことまで知って

いた」と振り返る。良雄氏は生前に布石を打って、「雅志が気仙沼に帰ってきたら、地域に幾分役に立つように修行中なので、よろしく

がれきの中で安否確認作業

2011年3月11日、雅志氏は震災を迎えた。東日本大震災でモリ保険事務所のあった鹿折地区



東日本大震災で被害を受けた気仙沼鹿折地区

地震保険は命の次に大事なものの

保険の場合、一般的に承継は父子の間でも難しいといわれる。しかも、何の引き継ぎもなされていない状況だ。こうした厳しい状況下での承継を可能にしたのは、生前の良雄氏の保険に対する強い思いがあったからにほかならない。

が壊滅、事務所も土台を残してすべてが流された。機器、書類が流失し、写真1枚すら残らなかった。被災後は避難所

雅志氏が仕事を継いだ段階で、多くのことを顧客から教えてもらったという。通常、情報を取りに行くことが代理店の仕事だが、

を放ってはおけない」。雅志氏はがれきの中を顧客の安否確認に走った。長靴は3足だめにした。気仙沼は冠水し、水が引かない中で足に釘を刺したこともあった。

気仙沼港の近くに住み、津波の被害に遭った顧客の一人はこう語る。「津波がどつと押し寄せ



蔵を改造した事務所

気仙沼では、かつて繁栄した遠洋まぐろ漁船の企業などが少なくなつて

事業縮小を余儀なくされていく中で、保険業を支えてくれたのは地域の個人顧客だった。これまでも、そうした地域の人々を守ることを優先してきた。しかし、一方で不安もある。気仙沼をはじめ、被災地では高齢化が進行している。契約者も年齢層が高くなり、若年層が県外へ出てしまつて現

中心に保険ショップ形式にし、2階には顧客との相談室を設けた。サラウンドシステムとプロジェクトターによる大型スクリーンも用意した。顧客とゆっくり保険について語れる場所を持ちたかったからだ。厚い壁の蔵の構造は、音響効果にも優れ、映像と併せると映画館に座っているような心地よい空間が演出できる。雅志氏はスマートフ

「東日本大震災では多くの御霊を失った。自分には生きていく定めがある。神様が与えた宿題だ。生きていく限り、ほかの復興への思いを継いでいかなければならぬ。被災地は1次産業、2次産業だけでは成り立たない。仮に、保険業界や世界的な研究機関などが駆け回って被災した気仙沼の皆を支えてくれた。立派になったね」

「東日本大震災の苦勞に比べれば、あなたの留学の苦勞などたかが知れている。震災の中であなたが駆け回って被災した気仙沼の皆を支えてくれた。立派になったね」

こうした状況は一過性の問題ではなく、地域に生きる代理店にとって極

めて厳しい問題となっている。今回、被災した企業は港周辺地域の水産加工業者が多いが、モリ保険事務所では、水産加工業者の顧客は少なかった。雅志氏は、地域密着の代理店経営には裾の広がる個人顧客とコツコツと付き合っていく方が経営上のリスクが少ないと考えていたからだ。過去、気仙沼の基幹産業が衰退し、数多くの得意先が倒産や

東日本大震災で事務所は流失した。住宅も失った。残っていたのは一つの古い蔵だった。「蔵を改造して事務所にした。失うものは何もない」との考えが、蔵を事務所にするという奇想天外な発想を生んだ。

雅志氏の現在の思いは、地域の復旧と復興。東日本大震災では多くの御霊を失った。自分には生きていく定めがある。神様が与えた宿題だ。生きていく限り、ほかの復興への思いを継いでいかなければならぬ。被災地は1次産業、2次産業だけでは成り立たない。仮に、保険業界や世界的な研究機関などが駆け回って被災した気仙沼の皆を支えてくれた。立派になったね」

(おわり)



音響効果の高い蔵事務所内部



いる。建設業もしかりだ。今回、被災した企業は港周辺地域の水産加工業者が多いが、モリ保険事務所では、水産加工業者の顧客は少なかった。雅志氏は、地域密着の代理店経営には裾の広がる個人顧客とコツコツと付き合っていく方が経営上のリスクが少ないと考えていたからだ。過去、気仙沼の基幹産業が衰退し、数多くの得意先が倒産や

雅志氏は「気仙沼は2、3年は大丈夫だろう。だが、その先のめどがまだ立っていない。高齢者が多く、若い世代が少なくて、高年齢層が震災によって助長されている」と言う。

「東日本大震災で事務所は流失した。住宅も失った。残っていたのは一つの古い蔵だった。「蔵を改造して事務所にした。失うものは何もない」との考えが、蔵を事務所にするという奇想天外な発想を生んだ。

雅志氏の現在の思いは、地域の復旧と復興。東日本大震災では多くの御霊を失った。自分には生きていく定めがある。神様が与えた宿題だ。生きていく限り、ほかの復興への思いを継いでいかなければならぬ。被災地は1次産業、2次産業だけでは成り立たない。仮に、保険業界や世界的な研究機関などが駆け回って被災した気仙沼の皆を支えてくれた。立派になったね」

東日本大震災で事務所は流失した。住宅も失った。残っていたのは一つの古い蔵だった。「蔵を改造して事務所にした。失うものは何もない」との考えが、蔵を事務所にするという奇想天外な発想を生んだ。

雅志氏は「気仙沼は2、3年は大丈夫だろう。だが、その先のめどがまだ立っていない。高齢者が多く、若い世代が少なくて、高年齢層が震災によって助長されている」と言う。

「東日本大震災で事務所は流失した。住宅も失った。残っていたのは一つの古い蔵だった。「蔵を改造して事務所にした。失うものは何もない」との考えが、蔵を事務所にするという奇想天外な発想を生んだ。

雅志氏の現在の思いは、地域の復旧と復興。東日本大震災では多くの御霊を失った。自分には生きていく定めがある。神様が与えた宿題だ。生きていく限り、ほかの復興への思いを継いでいかなければならぬ。被災地は1次産業、2次産業だけでは成り立たない。仮に、保険業界や世界的な研究機関などが駆け回って被災した気仙沼の皆を支えてくれた。立派になったね」